

## 〈健康な肉体〉の発見：坂口安吾「女体」から「恋をしに行く」へ

花田, 俊典  
福岡女子大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/12053>

---

出版情報：語文研究. 52/53, pp.156-166, 1982-06-10. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## 〈健康な肉体〉の発見

——坂口安吾「女体」から「恋をしに行く」へ——

花 田 俊 典

坂口安吾が敗戦とそれにつづく戦後の混迷をいわば文化の再建の好機と捉えていたことは、いまさら贅言するまでもないだろう。けっきょく安吾が「墮落論」(「新潮」昭21・4)以下の言説で繰り返した説いたのは、いまこそ文化の真の意味での再建——個人に即して言うなら自我の確立——を第一歩からなすべきであり、そしてそれがおよそ軽率であってはならない、ということであった。

いったい文化は、知性の所産にはかならない。にしても、この現代にあって、はたして知性とは何か。

安吾は戦前すでに、「もはや我々の生活では、最も人工的なものが本能であり得る」(「Pierre Philosophie」)と述べたことがあった。そしてそこから、今日の新しいモラルの建設を目ざして、いわゆる精神と肉体の問題に取り組んでいこうとする姿勢を見せていた。新しいモラルの建設とは、この場合、文化の再建なり、あるいは自我の確立と言いかえてもさしつかえないだろう。周知の書き下ろし長篇小説「吹雪物語」(「竹村書房、昭13・7」)に至る一直線

の軌跡がそれを明瞭にも語っているところだが、ただ、「吹雪物語」の挫折以後、こと精神と肉体の問題自体に關しては、一見したかぎり、安吾の当面の関心の外に置き去られてしまったかの観があった。もちろん、より正確に言うなら、それはまったく置き去られていたのではなくして、それなりに安吾の内部であたためられ、しだいに醗酵をつづけていたのであった。

とまれ、こういった戦前の閱歴からして、戦後の安吾がさかんに人間における本能とか肉体の存在ということに着目していったのは、なかば約束されていた自然ななりゆきであったと言える。例の、「僕の書くのは肉体と精神との結婚、その宿命を負う人間の懊惱以外にありません」(昭21・7・24尾崎士郎宛書簡)との言は、安吾がいま一度あらためて精神と肉体の問題に本格的に取り組むことから再出発していこうとする決意を固めたことを示している。おそらく安吾自身にしてみれば、こういう問題を抜きにした文化の再建、あるいは自我の確立、新しいモラルの建設など、しよせん不毛に終ってしまふものにすぎないと思えなかつたのだろう。

具体的に安吾の主張は、たとえばエッセイ「肉体自体が思考する」

(「読売新聞」昭21・11・18)のなかによく見ることができ。そこで安吾は、当時日本に翻訳紹介されたばかりのJ・P・サルトルの小説「水いらず」を取り上げて、次のように言う。

サルトルの「水いらず」が徹頭徹尾、ただ肉体自体の思考のみを語ろうとしていることは、一見、理知がないようだが、実は理知以上に知的な、革命的な意味がある。

私は今までサルトルは知らなかったが、別個に、私自身、肉体自体の思考、精神の思考を離れて肉体自体が何を語るか、その言葉で小説を書かねばならぬ。人間を見直すことが必要だと考えていた。それは僕だけではないようだ。洋の東西を問わず、大体人間の正体というものが、モラルというものを肉体自体の思考から探さねばならぬということが、期せずして起ったのではないかと思う。

さらにこのあと安吾は、「これからの文学が、思考する肉体自体の言葉の発見にかかっているということ、この真実の発見によって始めて新たな、真実なモラルがありうることを私は確信するのであるが、この道は安易であってはならぬ」とも言っている。

こういった安吾の発言からただちに想起されてくる小説の一つに、あの高名な「白痴」(「新潮」昭21・6)一篇を挙げることができらう。「白痴」執筆の段階で安吾がどこまで明確な方法意識をわがものとしていたかはひとまず傍に置くとして、「白痴」では、たしかに「新たな、真実なモラル」の構築に向けての、「思考する肉体自体の言葉の発見」の試みが実質的になされていたと言っている。

いま「白痴」の内容に詳しくふれる余裕はないが、いちおう簡単

に確認しておくなら、そこで伊沢は白痴の女を前にして、「人間の正体というものを」を見きわめ、その「肉体自体の思考」に思いを馳せることによって、しだいに自身の似而非インテリ性を剝奪してゆき、ついには深い絶望のなかから明日への一步をとまかく踏み出してみようと思い定めるに至っていた。その伊沢の最後の足どりは、しかし「生きるための、明日の希望がない」ゆえに重く、のろい。が、それが同時に前方を見据えた力強いしかな響きを持っていたのは、もはや彼が「人間」として一步も退けぬところに立たされていたからにはかならない。すなわち、伊沢に残された行為は、ただ前に向かって歩きはじめること以外になかったわけだ、だとすれば、「白痴」とはつまり、白痴の女を人聖なる愚 $\vee$ と見立てることで、現代に生きる知識人の知性の脆弱さを剔抉し、自己再建の必要性と可能性を描いてみせた小説であったと言えるだろう。

しかしながら、すこし見方を変えて言うなら、安吾はそこで、白痴の女を人聖なる愚 $\vee$ と見立てることより以上には何ら具体的な再建策を示してはいなかった。伊沢の再出発への足どりが力強くてたしかだとはいうものの、そのエネルギーは、「根の下りた生活に突き放されたという事実自体は立派に根の下りた生活であります」(「文学のふるさと」という、かつて安吾が苦闘のすえに手に入れた論理を唯一の源としているにすぎず、何がしかの目算が明日にあってのことではなかった。伊沢はちょうど起き上がり小法師のように、作者から無条件に命じられて、ともかく再び歩きだすことにしようと思ひ決したまでであった。

もとより、そのことで「白痴」一篇を貶めるつもりはない。作品の意図を度外視した無いものねだりはつつしむべきだろう。だが、

明日の問題として、伊沢にどのような生の活路があるのか。伊沢の再起を支えた論理は、なるほど一人の知識人を死と破滅から救いはするが、しかしそれ以上に具体的な生き方を示すものではない。とすれば、つまり死と破滅から永遠に拒否されてあるともいえる伊沢は、これよりさき何がしかの具体的な目算を見出していかないかぎり、起き上がり小法師にも似た単調な精神のドラマをいたすらに演じるほかないのである。

伊沢に残されていた最大の課題は、わが内なる白痴の女をさてどいうするかということであった。この課題を抱えて明日に立ち尽くした伊沢の姿は、同時にまた、作者安吾の姿でもあった。今日とまったく同じドラマを明日も演じることは許されない。

ここに、「白痴」の次の作品としての「女体」(「文芸春秋」昭21・9)、およびその続篇「恋をしに行く」(「新潮」昭22・1)が登場してくることとなる。

## 二

「女体」に関しては「戯作者文学論」(「近代文学」昭22・1)という、作者みずからそれが「どういう風につくられて行くかを意識的にしるした日録」がある。昭和二十一年七月八日から同二十九日までの二十日間余りの「日録」だが、その最初の七月八日付の部分には、「女体」執筆の動機が次のように書かれている。

私はこれから、ある長篇の書きだしを書こうとしている。私がこの小説を考えたのはこの春のことだ。私はこの春、漱石の長篇を一通り読んだ。ちょうど同居している人が漱石全集を持っていたからである。私は漱石の作品が全然肉体を生活してい

ないので驚いた。すべてが男女の人間関係でありながら、肉体的なものがない。(中略)

私はこういう軽薄な知性のイミテーションが深きもの誠実なるものと信ぜられ、第一級の文学と目されて怪しまれぬことに非常なる憤りをもった。然し、怒ってみても始まらぬ。私自身を書くより外に仕方がない。漱石が軽薄な知性のイミテーションにすぎないことを、私自身の作品全体によって証し得ることができなければ、私は駄目な人間なのだ。それで私はある一組の夫婦の心のつながりを、心と肉体とその当然あるべき姿に於て歩ませるような小説を書いてみたいと考えた。たまたま、文芸春秋九月号の小説に、この書きだしを載せてみようと考えたのである。

「軽薄な知性のイミテーションにすぎない」漱石への過褒に対して「非常なる憤りをもった」とは、いかにもよくこの時期の安吾らしい発言で、たとえば谷沢永一などはこの安吾の漱石批判をまさしく△正論▽だとして積極的に支持しているところだが、それはさておき、こうして企図するに至った「ある長篇の書きだし」にあたる「女体」において安吾は、谷村と素子という一組の平凡な夫婦を登場させて、これまでお互いにいたわりあって生きてきた二人の胸のうちにしだいに生じた複雑微妙な心理の変調のさまを描こうとしている。

谷村と素子は、結婚してから十一年目の、三十八歳と三十七歳の夫婦である。まず谷村なる人物から見れば、彼は「生来病弱で」あり、いまでは「自分がこの年まで生きてきた小さな環境は、自分にとってはかけがえのないものであるから、人の評価の基準と別

に小さく穏やかにまもり通して行くことは自分の「分」というものだと思つて、毎日を暮らしている。一方、素子は谷村と同様に、「どちらかと言えば地味な、孤独な性格で、谷村と二人だけで高原の森陰とか田園の沼のほとりで原始的な生活をして一生を終りたいと考え耽るような人であつた」が、谷村の年来の観察によれば、素子とはまた、「献身」と「貪婪な情慾」という相反する二面性の所有者でもあつた。「一年に幾たびかある谷村の病氣のときは、素子は数日の徹夜を厭わず看病に献身」するに、「夜の遊び」となると「遊びに専念する無反省な娘のように、全身的で没我的であつた」というのである。

献身の素子と、貪婪な情慾の素子と、同じ素子であることが谷村の嘆きをかきたて、又、憎しみをかきたてた。情慾の果の衰えがやがて谷村の季節季節の病氣につながることをすらも無自覚な素子に見えた。献身は償いであろうか。衰亡は死によつて終り、献身は涙によつて終るであろう。数日の、ただ数日の、涙によつて。

谷村は、「然し情慾の素子と献身の素子には、償いと称するような二つをつなぐ論理の橋はないのだ」と思う。

素子の貪婪な情慾と、素子の献身と、その各々がつながりのない別の物だと谷村は思つた。素子の一つの肉体に別々の本能が棲み、別々のいのちが宿り、各々の思考と欲求を旺盛に盲目的に営んでいるのであろう。素子の理知が二つの物に橋を渡すことがあつても、素子の真実の肉体が橋を渡つて二つをつなぐということはない。そして素子は自分の時間が異つたのちによつて距てられていることに気付いたことはないのである。

にもかかわらず、谷村は、「咒いつつその情慾に惹かれざるを得ない」。「憎みつつその魅力に惑うわが身を悲しと思」いながら、けつきよく「自らすすんで素子に挑み、身をすてて情慾に惑乱」してしまい、今日に至っている。

「女体」は、このような谷村夫妻のもとに夫妻の絵の先生である岡本が金の無心に訪れるところから始まる。岡本の無心はいつものことで、谷村は以前から「その無心にはつとめて応じてやるように心掛け、小さな反応はつつしむ方がよいと思つて」いたが、「ある日のこと、虫のいどころのせいで、柄にもなく、岡本に罵罵を加えてしま」う。すると、岡本は「あさましいほど狼狽」して帰つていったが、そのあとで、なぜか素子がしつこく谷村にからんできた。すなわち素子は、谷村が岡本を「やりこめた」行為は、ちよつと「子供達が石投げして遊んでいると蛙に当って死ぬ話のようなもので、「子供達には遊びにすぎないことが、蛙には命にかかわることな」のだから、はつきり「お金が惜しいなら、惜しいと仰有るがよろしいのです」、と主張するのである。この素子のことばに顔きながら、しかし谷村は別のことを考へていた。

なるほど、その通りに違ひはない、と谷村は思つた。然し、それは谷村の自覚の上では軽微なものにすぎなかつた。

別の生々しい思念が彼の頭に渦巻いていた。それは、なぜ素子は蛙の代弁をしなければならなかつたか、ということだつた。そして、さまざまな思案をめぐらしたあげくに、やつと谷村が思い當つた結論は、近所に住む大学生の仁科にまつわる次のようなものであつた。

谷村は思つた。この数年来、仁科に対して見せている谷村の

態度が、素子の反感をそだてていたのではなかったか、と。谷村は常に仁科をやりこめる。その作品を嘲笑する。みじめな思いをさせている。そして怒らせて悦に入っている。素子はその谷村にひそかに憤懣をよせていた。そして、やや似た事態が岡本の場合に起ったとき、岡本に仮託してかねての憤懣を吐きだしているのではないかと。

とすれば「かかる憤懣をひそかに燃す素子は、いつか仁科を愛しているのであろうか」、と谷村は考えるが、それでも「素子の魂の純潔を疑る思いは微塵もなく、長い旅路の大きな感謝があるだけ」で、「あらゆる人々に夢がある」ように素子にもまた秘められた「夢」があるのは自然であって、それはそれとしてよいではないか、と思う。ただ、谷村は、こんなささいな事件をきっかけにして、しだいに変貌しつつあった。

谷村は身体の調子が又ひとしきり弱くなってきたように感じた。そして、そういう変調のかすかなきざしから、肉体の衰弱よりも、肉体の衰亡を考えるようになっていた。すると必ず素子にひそかな憎しみを燃やすようになっていた。それは素子の肉体に対する嫉妬であらうと谷村は思った。そして、嫉妬する自分も、嫉妬せられる素子も、ともどもに悲しいさだめなのだと思う。だが、近頃は、自分が悲しいのは分る。然し、なんで素子が悲しいさだめであるものか、と疑りだす。俺も我がままになったものだなと谷村は思うが、なぜ我がままでないのか、我がままではないではないか、と吐きだすように思うようになっていた。

この谷村の変貌をいゆる自我の覚醒だと言いついたら、言い過ぎ

になるだろうか。谷村の年来の思いは、それが孕んでいたある不自然さのためにいま現実（肉体）からのいわば復讐を受けて、どうやら崩壊を余儀なくされている。それゆえ谷村は、素子の「夢」をよしとしながら、一方では自分の「我がまま」な願望を如何ともしがたい欲求に駆られてゆくのである。

俺が死ぬ、すると素子はいったどこへ歩き去ってしまったの  
だろう？（中略）

考えすぎではいけないのだ、と谷村は思う。このささやかな現実、ささやかな生命に、精一ぱいのいたわりと愛情だけをそそがなければ、と。

然し、谷村は熱烈な恋がしたいと思った。肉体というものがない、ただ精神があるだけの、そしてあらゆる火よりも強烈な、燃え狂い、燃え絶ゆるような激しい恋を。その恋とともに掻き消えてしまいたい、と谷村は思った。

かくして、「ある一組の夫婦の心のつながりを、心と肉体とその当然あるべき姿に於て歩ませるような小説」（「戯作者文学論」）としての「女体」は、谷村と素子とにそれぞれ未知の明日を残して、ひとまず閉じられている。

### 三

安吾が「女体」で描いた素子は、いま見たとおり「献身」と「貪婪な情慾」との二面性を有していた。より厳密に言えば、すくなくとも最初はそうであった。そのかぎりにおいて、「貪婪な情慾」と同等に「献身」の側面を持ちあわせた素子の登場は、あの肉慾の権化そのものでしかなかった白痴の女に「献身」が付加された、ある

意味で注目すべき新しい女の型の出現であったと言える。

しかし、ただちにそれは、次のようなかたちで処理されてしまう。

素子とは何者であるか？ 谷村の答えはただ一つ、素子は女であった。そして、女とは？ 谷村にはすべての女がただ一つにしか見えなかった。女とは、思考する肉体であり、そして又肉体なき何者かの思考であった。この二つは同時に存し、そして全くつながりがなかった。つきせぬ魅力がそこにあり、つきせぬ憎しみもそこにかかっているのだと谷村は思った。

ここに言う「思考する肉体」とは「貪婪な情慾の素子」をさし、「肉体なき何者かの思考」とは「猷身の素子」をさしているわけで、だとすれば、「素子とは何者であるか？」といった問いかけのまえに、「肉体なき何者かの思考」にすぎない素子の「猷身」性が有効でありえるはずがない。すなわち、「猷身の素子」を「肉体なき何者かの思考」の結果だと見なしたこの時点から、それまでの「猷身の素子」と「貪婪な情慾の素子」との同等な関係そのものがくずれ去って、もはや素子はただ「貪婪な情慾の素子」であるよりほかなくなってしまうのである。

したがって、このあと谷村は素子について次のような考えを抱かざるをえない。

俺が死んだら、と谷村は考える。素子は岡本のような好色無恥な老人の餌食にすらなるのではあるまいか、と。恋愛などという感情の景物は有っても無くても構わない。ただ肉体の泥沼へはまりこんで行くだけではないのか。するとそのとき、素子のひろい心だのあたたかい思いやりなど、それは鳥がさした孔雀の羽のようにむしりとられて、鳥だけが、肉体という鳥だけ

が現れてくるのではないか。

すなわち、素子の「猷身」性など、しょせん「鳥がさした孔雀の羽のよう」なものだというのである。

ところで、「戯作者文学論」によれば、安吾は素子のモデルに矢田津世子を考えていたという。七月十四日付の部分にそれがある。

この素子に私は、はっきり言つてしまおう、矢田津世子を考えていたのだ。この人と私は、恋いこがれ、愛し合っていたが、とうとう結婚もせず、肉体の関係もなく、恋いこがれながら、逃げあったり、離れることを急いだり、まあ、いいや。だから、私は矢田津世子の肉体などは知らない。だから、私は、私の知らない矢田津世子を創作しようと考えているのだ。私の知らない矢田津世子、それは私の知らない私自身と同様に大切なのだと思うだけ。私自身の発見と全く同じことだ。

すなわち、実在の恋人矢田津世子のイメージそのものを借りてきて、それを空想のなかで育てていこうとしたというわけで、あるいはモデルとまではよべないかも知れない。が、つづけて安吾が次のように書きつけていることには留意しておく必要があるだろう。

私は然し、ひどく不安になっている。どうも荷が重すぎた。私は素子が恋をするような気がするのだが、それを書けるかどうか、私は谷村の方を主人公にして、それですませたい。私は素子がバカな男と恋をするような気がして、どうにも、いやだ。こんなことが気にかかるというのはいけなことだと考えている。

素子に矢田津世子のイメージを重ねあわせたというだけで、安吾はつまり、作家としての自由な創作の立場をおびやかされている。

それはまた、翌十五日付の記事の中に、より具体的にうかがうこ

とができる。安吾はそこで、「昨日、私は、素子は矢田津世子だと  
言った。これは言い過ぎのようだ。やっぱり素子は素子なのだ」と  
前言をいちおう訂正したりしているが、けっきょく次のような思い  
に駆られて苦しんでいる。

私は今も亦、あなたの肉体を、苦しめ、汚し痛めているのだ。  
私はあなたの肉体を汚そうと意図しているのではなく、いつも  
あなたの肉体や肉慾を、何ものよりも清らかなものに書くこと  
ができますように、ほんとうにそう神様に祈っています。書  
きはじめると、どうしても、汚くしてしまふ。(中略)

私は筆を休めるたび、あなたを思いだすと、とても苦しい。  
素子の肉体は、どうしても、汚い肉慾の肉体になってしまふ。

こういったことからして、素子が「献身」性を剣奪されて「貪婪  
な情慾」そのものの存在となってしまう経緯の背後には、矢田津世  
子をめぐる安吾個人のいわばなま身の想念がかなり深く絡んでい  
た、とひとまず言える。だが、それで問題が片づくわけのものではな  
い。しつこいようだが、安吾は「戯作者文学論」において、「素子  
は矢田津世子ではないけない。素子は素子でなければいけない。素子  
は素子だ」と繰り返していった。ならば、かりにそれが実現しえ  
たとして、つまり矢田津世子への想念の呪縛から完全に解放されて  
自在に素子の造形をなしえる条件を手に入れたとして、それでは当  
時の安吾がいったい素子以外の如何なる女を描くことができたとい  
うのか。

素子とは、とまれ「あらゆる女の中の女」なのである。いわゆる  
△女▽の典型なのである。素子が△女▽の典型である以上、いくら  
第二、第三の素子がそれぞれの個性を具えて登場してきたにせよ、

「すべての女がただ一つにしか見えない」谷村の、いや安吾の前に  
あっては、つまるところ「貪婪な情慾」そのものでしかない一人の  
素子へと収斂していくほかないのではないか。

ここに、この時点における安吾の限界がある。白痴の女の明日を  
開こうと試みながら、けっきょく素子を白痴の女と同化させてしま  
った「女体」の「不出来の」(「戯作者文学論」)作品たるゆえん  
がある。そして、それを黙して語らぬ「戯作者文学論」の巧まざる  
陥穽にもまた、ちなみに目を向けておくべきだろう。

だとすれば、素子が白痴の女と同じような存在になった段階で、  
谷村夫妻に各々の恋をさせるといふ「女体」の当初の計画は、はや  
くも実質的に破綻せざるをえなかったと言いうことができる。もとよ  
り安吾自身がそれに気づかなかったはずはなく、「戯作者文学論」  
の七月十六日付の部分では、「どうも素子の方は、だんだん恋がで  
きそうもなくなっていく」との不安を洩らし、さらに「女体」を書  
きあげたという七月二十八日付になると、はっきり次のように言っ  
ている。

私はもう、素子をこれ以上登場させたくない。仁科とくだら  
ぬ恋をして、ただ肉体の最後の泥沼へ落ちるように思われた  
り、ともかく、どうも、素子を書く限り、その肉体を汚すこ  
と、弄ぶこと、まるで私はその清純に悪意をこめているとし  
か、復讐しているのしか思われない。この続篇は谷村に恋を  
させるつもりのだが、素子がそれをどう受けとめるか、私は  
素子に谷村の恋を知らせたくないような気持なのだ。素子が  
ヤキモチをやいて肉体に焦燥しだすのが堪えられない気持だか  
ら。

じっさい、素子のその後は、何も書かれていない。たとえ書かれなくとも、「白痴」の作者と読者にとっては、自明だからである。白痴の女ほどではないにしても、素子には、もはや「ただ肉体の最後の泥沼へ落ちるよう」な「くだらぬ恋」しかありえないからである。

#### 四

谷村だけが新しい恋をする。「女体」において、素子の「羞恥なき肉体」の醜悪さを思い知らされた谷村は、いつしか「肉体」というものがない、ただ精神があるだけの、そしてあらゆる火よりも強烈な、燃え狂い、燃え絶ゆるような激しい恋」を夢見るようになっていた。しかし、その「恋」が実体のない、ただの夢想にすぎないことを、すくなくとも安吾自身は承知していたはずである。

谷村の考えは、なんだか危っかしい。私は今日、藤子のことを書いたとき、谷村は魂の恋などと妙なことを言っているのだけれど、結局、藤子と、その魂の恋とやらをやり、馬脚を現すのではないか、そういう不安がしつづけている。それだったらずいぶん、なさけないことだ。悲しいことだ。みすばらしいことだ。

これも「戯作者文学論」からで、七月二十二日付の一節だが、この多分に演技めいて見える「不安」を安吾がほぼ確実に適中する命運にあるものとして受けとめていたであろうことは想像に難くない。「馬脚を現す」ほかない「魂の恋」を夢見る谷村と、「ただ肉体の最後の泥沼へ落ち」てしまುದらう素子——「女体」とはある意味で、「白痴」の再演、いやむしろ「白痴」以前のドラマだった

とも見えなくはない。谷村がいつも簡単に素子を見切って別な女との△恋▽に思いを馳せたりする「女体」の結末には、「外套と虚空」(「中央公論」昭21・7、ただし執筆は昭21・2頃か)と似通ったところがあるわけで、その点において、「精神」の象徴たる伊沢が「肉体」の象徴としての白痴の女を起してともかく歩きだそうと決意する「白痴」のほうが、かえって「女体」の後日譚としての性格を結果的にそなえている。

だが、これとて安吾は気づいていたと言うべきだろう。たしかに、いまさら「女体」で谷村に「魂の恋」などという「妙な」夢を抱かせる安吾の態度は、一見したかぎり、いささか不自然で滑稽とも映る。が、じつはそういう谷村の願望は、いったん「白痴」をふまえたうえで、見果てぬ夢にほかならないのである。結果はさておき、「女体」はつまり、「白痴」のドラマを内で演じつつ、さらにさきを目ざしていると思なして当を失っていないのである。

それゆえ、安吾はあえて、谷村に新しい「恋」をさせる。もちろん安吾のなかに、新しい「恋」の成算があつてのことではない。ともかく谷村に素子と別の女と「恋」をさせ、谷村の夢見る「魂の恋」が早晩「馬脚を現す」、そのなかば必然の展開のなかから何ものかを得ようとした、というのが「女体」を書き終えた時点での安吾のいつわらざる実状であつたのだろう。

はたして、「恋をしに行く」において、谷村の「魂の恋」へのあこがれは、当然のことながら「馬脚を現す」こととなる。

彼の古い幻想は唐突に打ち砕かれていた。そして、新たな幻想が瞬時に位置をしめている。それは信子の肉体だった。彼がそれまで想像し得たこともない異常な情熱をこめた肉体だった。

なぜ今まで、この肉体を思わなかったかと谷村は疑った。思  
いみる手がかりがなかったのか。それもある。然し、肉体のな  
い、魂だけの、ということ自体が不自然だ。幻想的でありすぎ  
る。その幻想は自衛の楯だと谷村は思った。

そして、このあと谷村は、いきなり信子が「私だって、誰よりも  
あなたが好きだったのよ」と告白して倒れこんできたのに「混乱し  
て」、彼女を激しく抱いてしまうのである。

ところが、注目すべきことに、谷村にとって思いがけない事態が  
ここに現出する。

谷村は衣服をつけた。そして信子の腰から下の裸体を見つめ  
た。肉体の醜さは、どこにも見ることができなかった。如何なる  
事務的な動作もなかった。一枚の紙きれすらもなかった。全  
てはその奔放な姿のままに、今も尚、投げだされているのみだ  
った。

盲目的な情事の果てに谷村が予想していたであろう事態は、素子  
の場合と同じく「正視しがたくなる」ほどの「羞恥なき肉体」を  
深い絶望とともに思い知らされることであつたにちがいない。が、  
予想に反して、いま谷村は、信子の「裸体」に「肉慾の醜さ」を感  
じないという。「恋をしに行く」には、さらに次のように書かれて  
いる。

醜悪な、暗い何物を思い出すこともできなかった。

「信ちゃん。僕は今度は君の衣服をつけた姿が怖い。今日も、  
これから、君の衣服をつけた姿を見るのだと思う」と

「だって、いつまでも、こうしていられないわ」

「僕はもう君の裸体を見ている時しか、安心できなくなるのだろ

う。切ないことだ」

谷村は思わず咬いた。切ないことだ、と。然し彼は爽かであ  
った。その疲労の激しさ、全力の消耗された虚脱のむなしさに  
も拘らず。

肉体とは、このようなものでも有りうるのか、と谷村は思っ  
た。なんとという健康なものだろう。谷村のすべての予想が裏切  
られていた。然し、いささかも、悔いはなかった。この女は、  
何者であろうか。果して明日も今日の如くであろうか。

すなわち谷村はここに至って、「肉体とは、このようなものでも  
有りうるのか、」「なんとという健康なものだろう」との感慨を初め  
て味わうのである。

このいわば健康な肉体Vの発見は、谷村にとって、まさに思い  
がけない劃期の収獲であつたと言つてよい。ついに「魂の恋」の夢  
は実現しなかったにもかかわらず、谷村はいま、「爽か」な気分  
に満たされて、眼前の信子の裸体を正視している。おそらく、谷村  
の脳裡には、「肉体の最後の泥沼へ落ちる」ことから人間を救うひ  
とつの活路が漠然と直覚されているのであるだろう。それが言い過  
ぎになるなら、谷村は信子の女性に素子とは違う何かを認めて  
明日への希望をつないでいる、とは言えるだろう。

では、いったい信子は、どこが素子とは違ふのか。素子とは対蹠  
的な「先天的な妖婦で、嘘いつわりでかためた薄情冷酷もの、天性  
と犯罪者」として登場してくる信子は、しかし谷村の「幻想」の産  
物として描かれているにすぎず、谷村自身のなかでも信子の像は香  
として定まらない。素子と正反対の存在と見えながら、作品の後半  
部分すなわち谷村が信子を抱く直前の場面においては、素子と同じ

「女体」の所有者と化しているのである。

ただ、谷村の「幻想」がごとく破れ去ったあとの信子には、明らかに素子とは違ふ点がいくつもあるわけで、注目に値する。たとえば次の一節を見てみよう。

それから起つた事柄は、彼にはすべて夢中であつた。曾て彼の経験せざることのみだつた。二人は部屋いっぱいにくろげまわつた。あらゆることが、不自然でなかつた。そして彼は信子を下に見る時よりも、信子を上に見るときに、逆上のに感乱した。なぜなら、そのときの信子の顔はあらゆる顔に似ていなかった。信子は陶醉しなかつた。ただ、興奮した。その顔色は茶色であつた。それにやや赤みがさしていた。頬はふくらみ、目は燃えていた。その目は、とじることがなかつた。

素子が「夜の遊びに」「全身的で、没我的であつた」のに対して、信子は、「陶醉しなかつた」という。「没我的」な素子と「陶醉しな」い信子との違いについては、「いずこへ」（「新小説」昭和21・10）の次の一節が、よく語ってくれている。

単なるエゴイズムというものは、肉慾の最後の場でも、低級浅薄なものである。自分の陶醉や満足だけをとめるといふエゴイズムが、肉慾の場に於ても、その真実の価値として高いものでは有り得ない。真実の娼婦は自分の陶醉を犠牲にしているに相違ない。（中略）真実の価値あるものを生むためには、必ず自己犠牲が必要なのだ。人のために捧げられた奉仕の魂が必ず要だ。

つまり、素子とは「自分の陶醉や満足だけをもとめる」「低級浅薄な」エゴイストなのであり、信子は「自己犠牲」とまでではないか

いまでも、ともかく「陶醉しな」い分だけ素子より救われた存在であるのだろうか。

あるいはまた、信子は、谷村との情事のと、「如何なる事務的な動作も」しようとはしない。これも素子の場合とは違つてゐるわけで、「女体」には次のように書かれていた。

遊びのはてに谷村のみが我にかへつた。その時ほど素子を咒うこともなく、その時ほど情慾の卑しさを蓋し悲しむこともなかつた。素子は情慾の余燼の恍惚たる疲労の中で恰も同時に炊事にたずさわるもののような自然さで事務的な処理も行うのだ。かかる情慾の行いが素子の人生の事務であり、人生の目的であり、生活のすべてであると気付くのはその時であつた。谷村は目をそむけずにいられなくなる。彼は一人の情慾と結婚している事実を知り、その動物の正体に正視しがたくなるのであつた。もはや素子との違いの内実は明らかであるだろう。かつて谷村は、おそらく「信子の生きる目的は肉慾ではない」、ならば「信子の生きる目的は何物であろうか」、と考えたことがあつた。その「幻想」としての臆測と疑問とが、つまりは結果的に谷村のなかで最後までそのまま生き残つたということになる。

## 五

ただし、信子はまだ、素子の女体と対峙し、それを超克せんとする不動の存在となりえているわけではない。「信子の生きる目的は肉慾ではない」ということが、わずか一瞬間の真実として谷村に直覺されたにすぎない。素子と違つて、いまだ信子の「正体」は、何ら突き止められてはいないのである。

それゆえ、谷村は最後の場面で、信子は「果して明日も今日の如くであろうか」との不安な思いに駆られるし、さらには「この日のすべては不思議であった」と感じたりする。そして、「恋をしに行く」は、次のように結ばれている。

彼は素子の肉体を考えた。その醜怪を考えた。魂の恋とは、むしろ肉慾の醜怪な二人が。彼はそう考えて、その厭らしさに、ほろにがかった。

魂とは何物だろうか。そのようなものが、あるのだろうか。だが、何かが欲しい。肉慾ではない何かが。男女をつなぐ何かが。一つの紐が。

すべては爽かで、みたされていた。然し、ひとつ、みたされていけない。あるいは、たぶん魂とよばねばならぬ何かが。

谷村は再び、素子の女体に思いを馳せて、「魂の恋」をやはり夢想せずにはいられない。谷村にとっては、素子がA女Vの唯一の典型であることに依然として変りはないからである。

もとより、谷村は、信子のA健康な肉体Vの秘密を明かしたうえで彼女の女体を不動の存在に高めていくことが、ひいては素子の女体を救う有力な方法となることを知らされている。が、だからといって、一気にその実現の成果を「恋をしに行く」に望むのは、ひかえるべきだろう。

さきに述べたように、「白痴」の次なる作品として取り組んだ「女体」において、安吾は当初、素子に「献身」性を付与しておきながら、けっきょくそれを生かしきれずに素子を白痴の女と同様の「貪婪な情慾」のみの存在としてしまった。それがいま、「女体」から四ヶ月後に発表された「恋をしに行く」に至って、一個の女体を、

たとえ特殊な事例で、しかも「幻想」の産物であったかも知れないにしろ、ともかく「爽か」なものとして捉ええたのである。それなりの評価は積極的になしておくのが当然だろう。

信子の普遍化——これが、繰り返すまでもなく、今後の安吾に残された課題であった。信子の普遍化とは、言い換えれば「献身の素子」の復権にはかならない。そして、それが実現されるには、いましばらく時をまたねばならないものようである。

## 注

1 「水いらす」は、吉村道夫の訳になるもので、雑誌「世界文学」第六号（世界文学社、昭21・10・30）に掲載されたのち、世界文学叢書3「水いらす・壁」（世界文学社、昭21・12・30）に収録された。したがって、安吾は「世界文学」誌上で「水いらす」を読んだということになる。

2 「無類派の批評精神——正論家・坂口安吾」（無類文学研究会編著「無類派の文学研究と事典」教育出版センター、昭40・8）